# つぎは四山の番か――
# 今のままでは危い
## 職場新聞「きずな」で指摘

### 人員不足は深刻

一月十八日の有明鉱の大惨事から十九日ぶりに三川鉱、四山鉱での生産再開となったが、災害以前の四山鉱でも、いつ重大災害が起きてもおかしくない状況であった。

会社は、有明鉱災害後、十八日間かかって、BC坑道を中心に三池労組や監督官の保安指摘箇所を改善してきたが、抜本的な改善とはなっていない。

昨年十二月八日の職場新聞〝きずな〟では、『今のままでは危ない』『人員不足のままでの合理化の増強では災害は増える』と題する見出しで、「上層三十五添卸関係での施枠が不十分なために、マイトによる倒枠が起こっている」と伝え、「掘進を急ぐあまり、高温現場を含む作業環境が悪化している」「常一番関係の仕繰や電気、機械工の人員不足は深刻だ」と強調している。

一月二十日号の〝きずな〟では、十二月二十六日の保安会議の中で人員不足の問題をめぐって岡本係長と論議したことにふれ、係長も「個人的な気持だが……人手不足を感じる。上にもいっている」こと、「四山は三川や有明鉱より出勤率が悪い」との発言に対して、「作業環境を無視した単純比較はおかしい」と指摘している。

四山鉱の山下鉱長は、くろだいやの新年のあいさつで、「今年から人事係も港沖の事務所に移転し…出勤の向上にも必ず効果を発揮するものと期待する」といっています。

有明鉱の坑口へ駆けつけた人びとをかき分けるように次つぎと遺体が……。

### 頻発災害が多発

一月五日、繰込場のあいさつで、「昨年は自然発火や頻発災害が他鉱より多かった。十分に点検をして死亡ゼロ二年間を達成し、他鉱に負けなき保安成績をあげよう」（くろだいや一月十五日付）といって、昨年、自然発火や頻発災害が数多く発生したことを認めている（昨年七月、三十五卸西七片払では自然発火のため、自走枠が入ったまま密閉されている）。

これは、有明鉱が頻発災害、百万人当たり災害率が三十台で、三池の『五十割り運動』に大きく貢献した。九・十・十・十一月の三カ月間の負傷減目標を連続達成したとして十二月十日、所長表彰を受けており、この有明鉱に負けないように競争しようというのが、山下鉱長の新年のあいさつの内容だった。

### 社葬前日に落盤

有明鉱災害の合同葬があった前夜、二十四日三番方で、六十添卸東四片払口（六百五十メートル地点）で落盤（四・二×四・十メートル）があり、合同葬の日に開発の岡本係長以下係員を急拠総動員して跡片付けやバレ仕繰りをしている。

二十八日目には、本層六十添卸東一片口で自然発火寸前の炭壁の異状な臭気があり、通気の係員が急拠二人の労働者に注水作業をさせた。これを、近くで働いている自走枠部内の労働者に知らせなかったばかりか、通気部内だけで処理しようとしていた。

また、昇坑するまで通気係長以外の鉱長以下副長や、他の部内の係長などにも知らされていなかった。これは重大な内容である。

有明鉱の災害から生産再開まで十八日間かかって、BCが停止した状態のなかで、不安全箇所のいろんな改善や処置がなされてきたが、われわれが以前に指摘してきたことが、「手が足りないから」と放置されていたものが、やっと保安作業の期間にやられたのである。よくなったのではない最低の保安整備ができたということだ。

### ベルトが臭い

生産再開したいま、二日目の七日、上層三十五卸第二ベルトから第一ベルトにつなぐPB（パンツアコンベア）の下にはすでにこぼれ炭が満ぱいとなり、翌八日には同じ箇所の第一ベルト落口で落炭防止の炭受けとベルトがこすれて臭気がする状態だった。現場付近の労働者がBCを止めて処置をしたが、生産再開をした現在、多くの箇所で不安全要素が発生している。

保安作業の期間にBC関係を中心とした坑道の整備は進んだが、坑道の施枠などについてはまだ未改善のところが多い。

今後、このような保安面での手を抜いていくようなら、ふたたび第二、第三と災害が起き有明鉱の二の舞をふむことになるだろう。

いま、四山では、「次は四山の番ではないか」とささやかれている。

生産再開はしたが、保安作業で整備した状況を維持し、さらに改善させるための職場での保安を守るたたかいがいっそう重要になってくる。（この項岩下幸男・記）

## また災害が……
## 有明鉱大災害に思う

今回の有明鉱大災害は、われわれにあらためて資本主義の冷酷さを教えてくれた。

われわれは機会あるごとに、『人間らしい生活を』と要求をしているが、この要求が今回の大災害において、その重大さを増幅したのです。

端的にいえば、坑内便所の設置についても会社はこれを無視し続けている。この要求は労働組合以前の人間的要求だが、このことだけを見ても彼らがわれわれを労働力としかみていないことがわかる。

われわれは、この大災害を期に具体的な要求を会社に突きつけていくことが第一義であろう。

決められたことを守らないのは会社ではないか。

保安のための設備のサボは三川鉱、四山鉱も有明鉱とほとんど同じか、あるいは悪いといわれる。また、極端な人員削減のために保安技術職員でさえもその責任が果たせず作業員の一員として生産に励げむ。これではまた同じ災害を招くことを警告しないわけにはいかないのだ。

（この項十分会 H生）

## 職場の声

### その一

災害が起これば、保安作業だ、保安点検だと会社はいうが、災害の起こる前の対策はなぜせんとか、いまでも、保安作業はしたが、保安対策はなにも具体的にはしとらん、このまま生産がはじまれば、また、もとのもくあみになりはせんか。

### その二

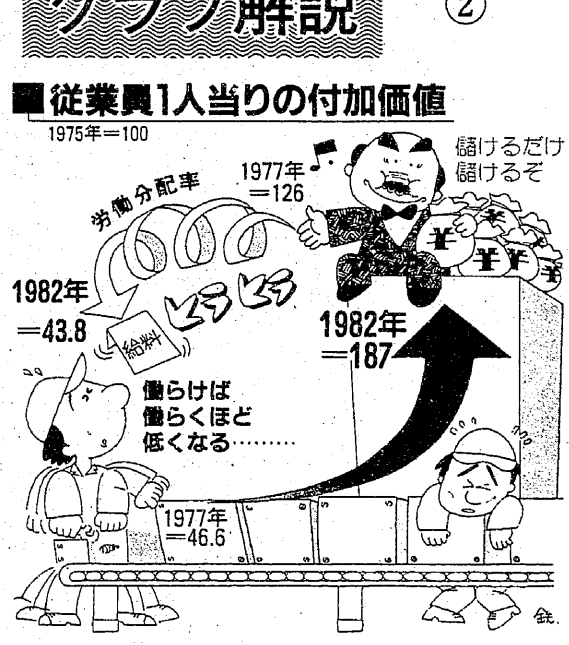
生産がストップされ、保安作業が続いているので、一部には〝金にならん仕事〟に不満が出ている。〝ノド元過ぎれば災害忘れる〟だ。災害を他人事だと思っているのだろうか？ 自分のことだけ考えているんじゃないか。

## 退職者 古賀正雄

雪霏々と還らぬ父を待つ母子
生き絶えし夫待つ坑口の深雪かな
坑底の夫の死報や雪に泣く
棺桶の坑帽語らず雪霏々と

古賀正雄さんは元宮浦鉱乙方機械工で、今回の有明鉱大災害で義弟（奥さんの弟）の吉末茂さん（五十一歳）を亡くされました。

## 84春闘の課題
## グラフ解説 ②




▼従業員一人当りの付加価値

労働者が生み出す企業の利益はのびても、労働分配率（企業の付加価値に占める賃金の比率）は逆に低下しています。

労働者一人当たりの付加価値は一九七五年を一〇〇とすると八二年には一八七に達しているのに、労働分配率は七二年の四・六％から八二年の四三・八％に、二・八％も下がっています。

## 有明鉱大災害発生後の三池労組の動き（摘録）

▼一月十八日。十四時十五分ごろ、南新開の組合員から、有明鉱で「非常退避」指令が出ているとの連絡を受ける。

十四時二十分ごろ本社保安部長に問い合わせたが、「報告を受けていない」との返事。まもなく折り返し「有明鉱で火災発生」の連絡を受ける。

状況把握のため執行委員を有明鉱に派遣。さらに重大災害との報を受けて増員。また、天領病院にも配置する。

▼一月十九日。執行委員会を開き情勢報告を受け、会社に対し三項目の緊急申し入れを行なう。

午後一時十六分、保安委員招集。炭労から橋本副委員長来組緊急ビラ配布。

四山鉱、三川鉱は保安整備作業に入る。

▼一月二十日 執行委員会を開き今後の対応について協議。橋本副委員長、炭労中執に報告のため帰京。

▼一月二十一日。執行委員会を開き会社に対し保安整備作業の継続と、通常作業は行なわないよう申し入れる。炭労から橋本副委員長、藤原事務局次長来組。『声明』発表。各所へ配布。

▼一月二十二日。炭労との合同執行委員会開く。

▼一月二十三日。委員会を開き、要求書と今後の具体的な取り組みを決定。

▼一月二十四日。炭労、三池労組、有明鉱入坑（森田、田口、栗野、松永）『みいけ』号外鉱門ビラ配布。

▼一月二十五日。臨時社休日。大牟田市体育館で合同葬執行。

▽

△

炭労、執行委員、委員、主婦会役員、原告団役員が参加。『みいけ』号外市内各所で早朝配布。ニュースカー情宣。保安監督局へ申し入れ。

▼一月二十六日。第一回団体交渉開く。新労、職組を弔問、総評・県評からのカンパを届ける。下請関係の入院者を見舞い、遺族を弔問、カンパを届ける。炭政会議入坑調査。

▼一月二十七日。衆院石特委現地入り、要望書を提出。執行部入坑点検。会社へ改善事項申し入れ、改善指摘事項監督局へ提出。

▼一月二十八日。執行委員会。執行部入坑点検 会社へ改善事項申し入れ。鉱門ビラ配布。

▼一月三十日 執行委員会。政府調査団現地入り。

▼一月三十一日。執行部入坑点検。会社へ改善事項申し入れ 政府調査団に要望書提出。

▼二月一日。執行委員会。執行部、委員入坑点検。会社へ改善事項申し入れ。

▼二月二日。第二回団体交渉開く。

▼二月三日。執行部入坑点検。

▼二月四日。委員会開く。

▼二月五日。監督局から四山、三川両鉱の生産再開の許可が出る。監督局へ生産再開と今後の保安確立について申し入れる。

▼二月六日。生産再開。二十四時間スト突入。市内各所で早朝ビラ配布。ニュースカー情宣。